

2025 年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」選考経過と選考結果

2025 年度の「若手研究者奨励賞」の選考過程と選考結果をご報告申し上げます。 31 件の応募があり、4 名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の 7 名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に講評をいただきましたので、あわせてご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 山下 玲子

受賞者（五十音順 所属学年は応募時のもの）

岩田 和也 (いわた かずや)	「見かけ上の分断」発生基盤の解明：中庸の発言抑制メカニズムの実証的検討	関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程 2 年
田崎 希実 (たさき のぞみ)	固定的知能観は、なぜ形成されるのか？—「繰り返される失敗」に着目した信念更新プロセスの検証手法の提案—	奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科 博士前期課程 2 年
原田 瑞穂 (はらだ みづほ)	現代社会で生じる類似性の過剰推測：異なる考え方を持つ他者との対立を深刻化させる認知プロセスの検討	名古屋大学大学院教育発達科学研究科 博士前期課程 2 年
費 思怡 (ひ しい)	人の心は言葉の壁を越えるのか？—外国語の使用が対人認知に及ぼす影響—	筑波大学大学院人間総合科学学術院 博士後期課程 2 年
平山 陽菜 (ひらやま はるな)	見知らぬ他者への援助行動の文化差：規範的影響の強さと規範の性質に着目して	東京大学大学院人文社会系研究科 修士 2 年
町田 賢治 (まちだ けんじ)	住居の流動性と精神的健康の関連：ミニマリズム傾向と経験的購入の役割	名古屋大学大学院情報学研究科心理・認知科学専攻 博士前期課程 1 年
三石 宏大 (みついし こうだい)	互恵性による格差拡大メカニズムの解明：関係形成過程に着目した検討	大阪公立大学 現代システム科学研究科 博士前期課程 2 年

「選考過程」

1) 募集開始と締め切り

7月1日に募集開始をホームページで告知し、メールニュースでも会員に告知した。締め切りは例年通り 9月30日とした。

2) 選考委員選出と一次審査

応募総数件に対し一次審査を行った。選考委員は応募書類に記載された指導教員を除いて、理事から1名、一般会員から3名に依頼した。

選考委員（敬称略）

理事より：小林 哲郎（早稲田大学）、

一般会員より：小島 弥生（北陸大学）、杉浦 淳吉（慶應義塾大学）、吉田 綾乃（東北福祉大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、この時点では選考委員は互いに匿名で審査をおこなった。各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与するものであった。

3) 第二次審査

第一次審査結果について従来の得点換算方法に従い、A評価を40点、B評価を10点、C評価を5点とし、各応募について合計得点を算出し、その後メールでの審議を行った。最終的に7件の応募を受賞対象として合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

以上

2025年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評（お名前の五十音順）

小島 弥生先生（北陸大学）

2025年度若手研究者奨励賞の審査の過程で、さまざまな研究手法・分析手法について改めて勉強させていただきました。自分の不勉強を反省する一方で、一つひとつのご研究の今後の展開が非常に楽しみにもなりました。さまざまな社会課題について、マクロな視点からミクロな視点まで多様なアプローチで迫ろうとする研究計画を拝読し、日本社会心理学会の懐の広さに改めて感じ入った次第です。

審査中での率直な感想は、どの研究計画も非常に洗練されていて、それぞれに高く評価できる点があり優劣つけ難かったということです。受賞した研究計画とそうではなかった研

究計画で何が違っていたかを言語化し難しいのですが、独創性に富んだ研究課題をどのようなアプローチで実現させていく計画であるかがスムーズに理解できる記述であったかがポイントであったように思います。受賞した、しないに関わらず、皆さまのご研究の成果を学会大会や学会誌上で拝見するのが非常に楽しみです。

小林 哲郎先生（早稲田大学）

応募いただいた研究計画はいずれも意欲的かつ独創性に富み、現代社会の複雑な問題に果敢に向き合おうとする姿勢が随所に見られ、審査を通じて私自身も大いに刺激を受けました。なかでも、社会的分断や不平等、対立の構造といった現代社会の課題に理論的視座を踏まえて取り組み、明確な問い合わせ方法を緻密に結びつけていた計画は、単なる提案にとどまらない発展性と説得力を備えていました。他方、着眼点の独自性が光りつつも、今後の理論的整理や方法の洗練によって一層の深化が期待される計画も多く、それぞれに確かな可能性を感じました。また、重要なテーマを掲げながら、枠組みの明確化や検証手続きの工夫によってさらなる飛躍が見込まれる計画も見受けられました。今回の受賞が、皆さまの研究者としての歩みをいっそう力強く後押しする契機となることを心より願っております。

杉浦 淳吉（慶應義塾大学）

本年度の若手研究者奨励賞は、いずれの研究計画も完成度が高く、選考は極めてハードな意思決定となりました。応募者の方々は社会心理学の最新動向を的確に踏まえており、審査を通じ、研究成果の発表を聞いてみたいと思わせる読み応えのある計画に数多く触ることができました。研究内容は、理論的蓄積を基盤としつつ今日的な社会的関心と結びつけるもの、社会心理学の知見を実践的に応用し課題解決を目指すもの、新たな研究手法で既存のテーマに新しい視点を与えるものなど多岐にわたっていました。異なる評価次元でそれぞれに優れた研究を前に、どこに線を引いたらよいかの判断は、審査者にとって決して軽いものではありませんでした。最終的には研究の核心となる「問い合わせ」の魅力が重要な判断材料となりました。本選考を通じ、社会心理学における問い合わせの在り方について、私自身も多くを学ばせていただきました。受賞された皆様に心よりお祝い申し上げます。

吉田 綾乃先生（東北福祉大学）

社会心理学の多様なテーマを扱った実証的な研究計画はいずれも読み応えがあり、社会の現実に目を向けながら、理論と方法を工夫して研究を構想しようとする姿勢が随所に感じられました。そのため、審査は大変悩ましく、時間をかけて検討させていただきました。なかでも、社会現象の捉え方と理論的視点、そして研究計画とのつながりを意識した提案は、全体として説得力があり、印象に残るものが多くありました。採択の有無にかかわらず、本奨励賞に応募し、評価を受けるという経験そのものが、研究者としての歩みを始めるうえで大切な機会になるのではないかと思います。私自身、このような形で審査に関わる貴重な機

会をいただけたことを嬉しく感じるとともに、社会心理学研究の幅広さや、社会問題の解決に向けた実践的な応用力など、その魅力を改めて実感しました。今後のみなさまの研究がさらに発展していくことを、心より願っております。

以上